



安政見聞誌
下

出所 刊行 安政	著者 不明	冊數 三冊	第 安政見聞誌 下 號
----------------	----------	----------	----------------------

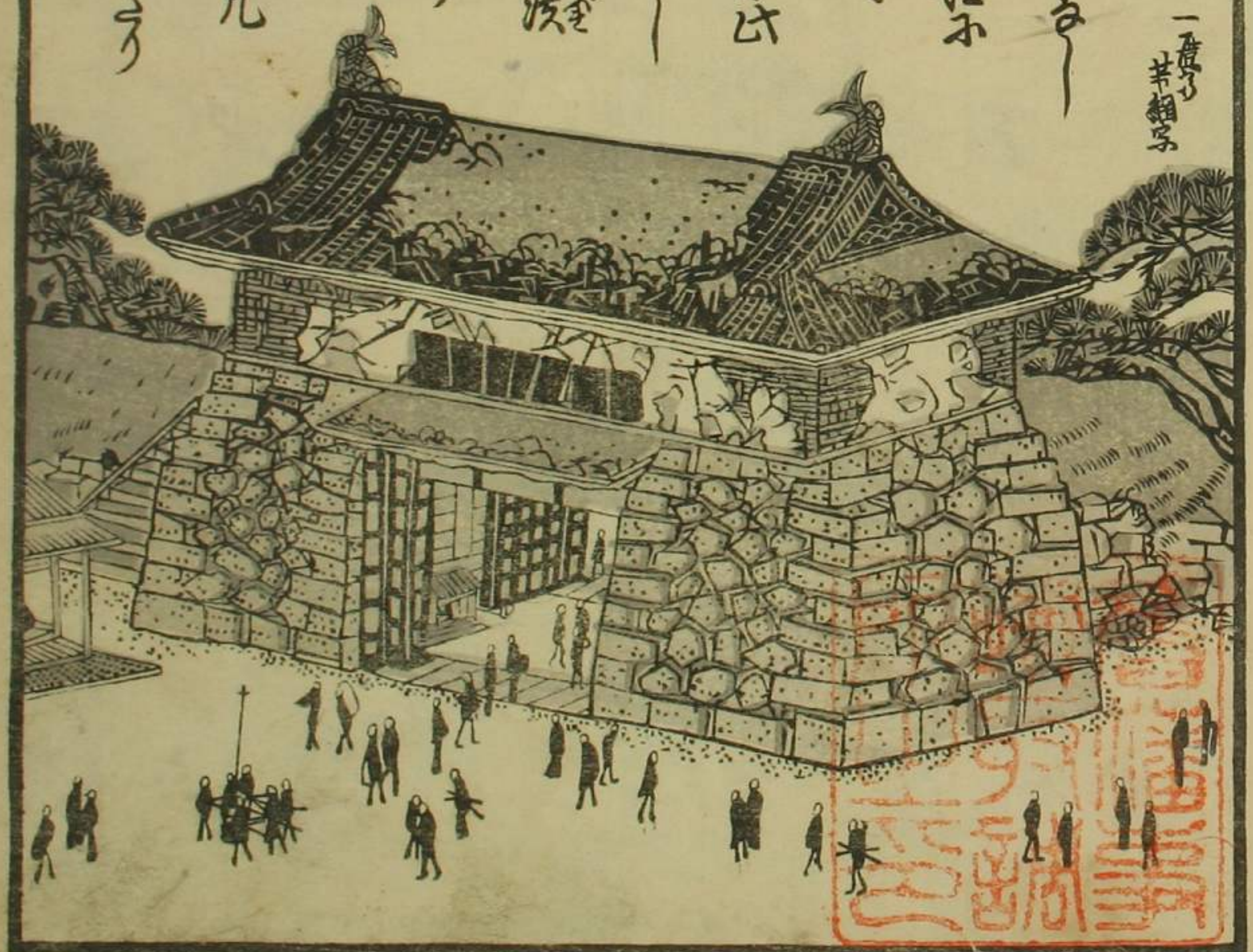
71
4209
3



門 71
 號 4209
 卷 3

高田

江戸御城の見附敷三千六百ヶ所あり
 一箇
 井欄
 け後の形表不て何程も破換甚る所あり
 筋申一四谷口の橋へ根より石垣不
 而と九段ふありのりたるおと一と
 堅固多と城門ふたしてのりて形不け
 おとくあるもと表表筋の強と弱
 改不太子東方馬場市法門等へ表渡
 其形も死板居せし所へ大破す及なり
 形も
 有と飛
 浄入園



高田

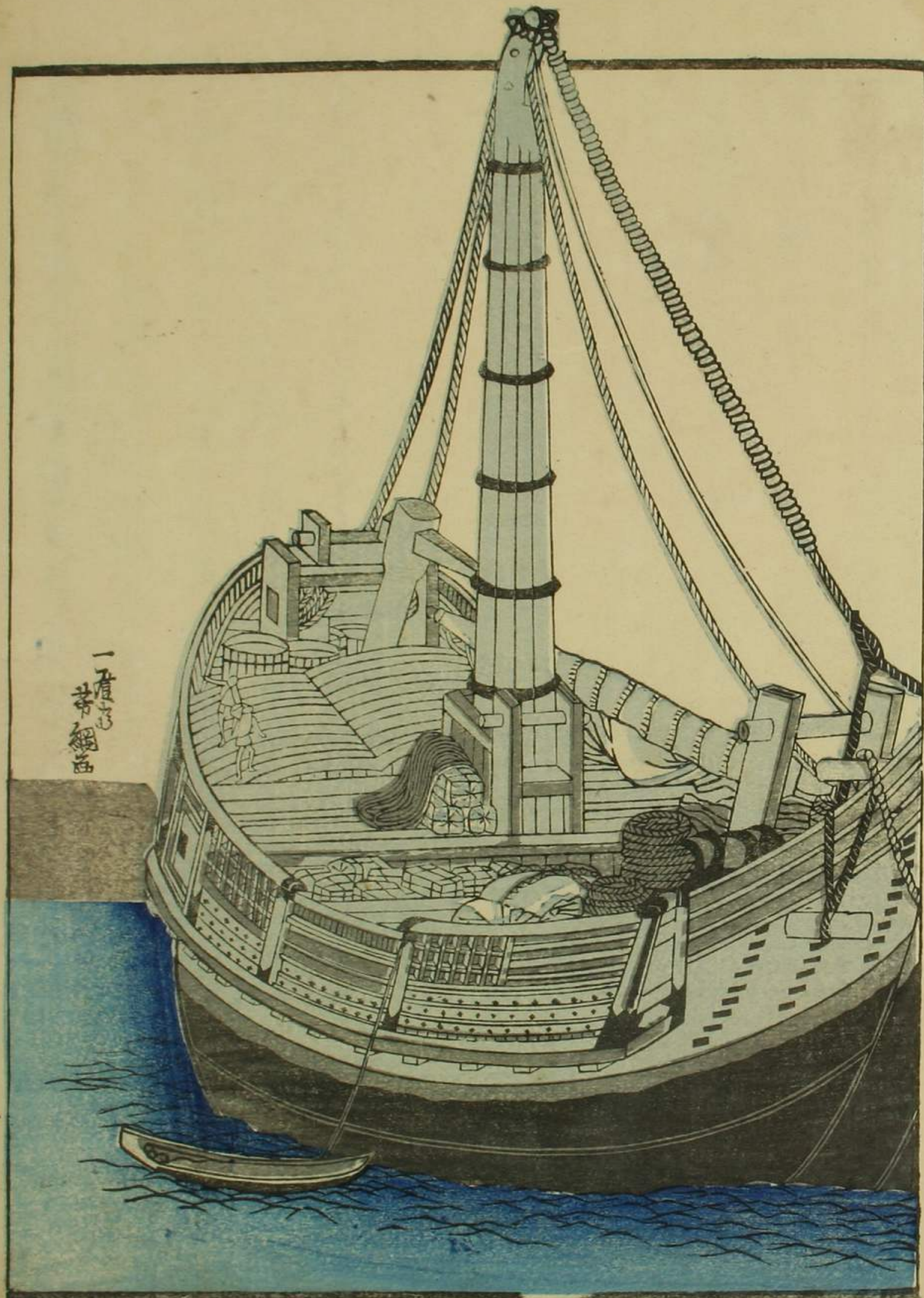
○今彼の地震子て破換の煙を
 へあり去取分葉井丁の煙突
 の煙をては下西方神明前まで
 三番丁門前丁の三日の夜まで
 の大家の大道へ倒落あまこの
 本尾ふて山のさきへあまふ
 火災のみううへ各お地の煙へ
 ろうんまより渡家の下よりうて
 怪我せし人もあまふをいへん
 屋根のよより樽と突て下地の
 五をを何て曲りま依又神明
 焼門のちり破換あま本社の



全長を同南方七郎丁戸前中の
 丁のあまふの初揺居たあ破換あま
 炭灰あま一総て火災のあまを
 他列あまも能亦最強一地震あま
 五て是あまあまの初揺強あま
 今たあまい合あまのあまあり

神威強あまあまをあまて
 初あま国民清あま
 伸一カあま
 くらあまあま
 住あまあま
 一筆あまあま





一層
舟

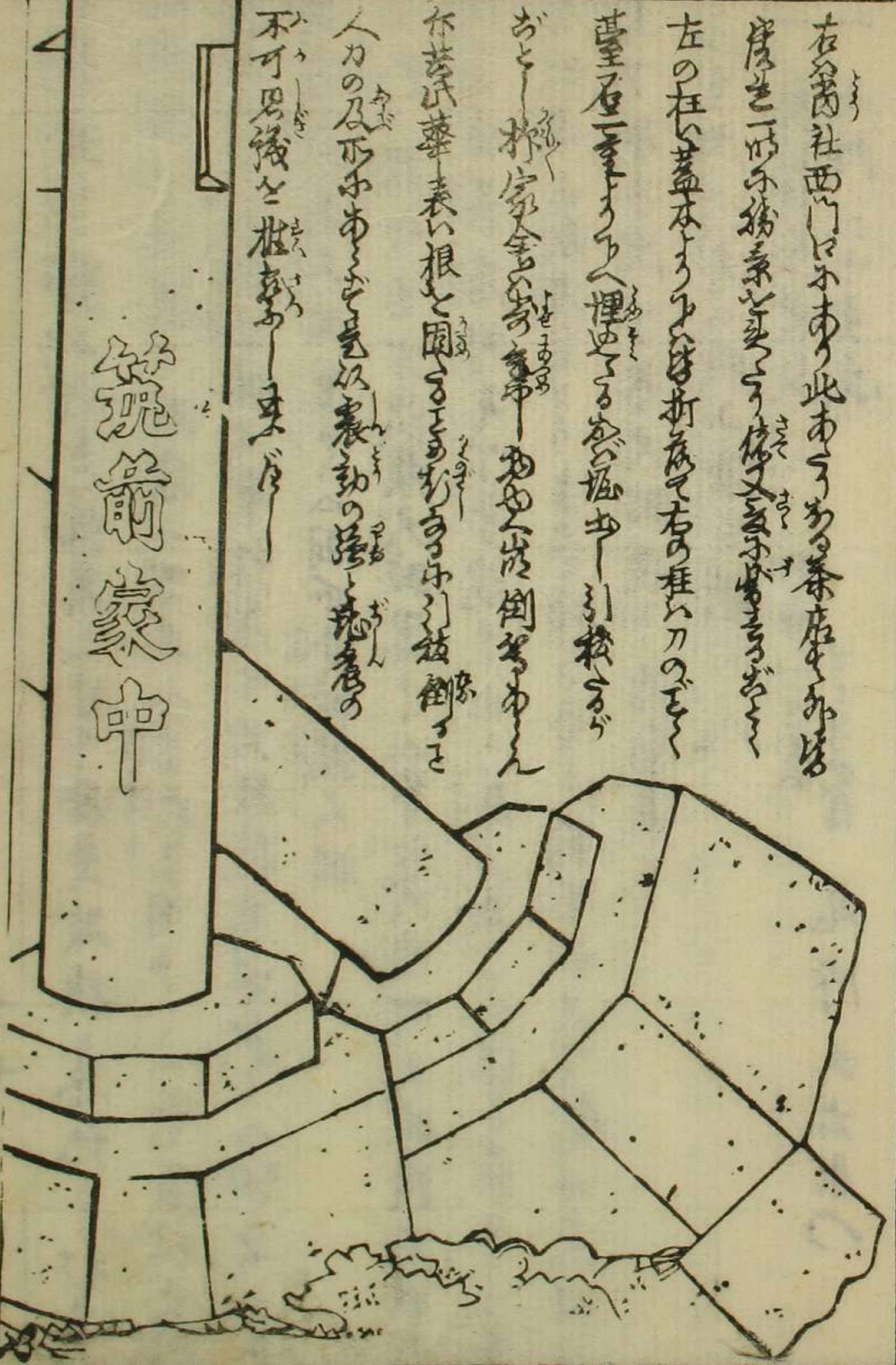
千五百大島次舟多し夜中魚と漁るふ
 妙と傳う十月首の夜船の干海と漁
 舟小田町の方舟人の噂々騒りのうらな
 ぞと船舟を付てるふ向多る山へ出
 るらふ近くる久良川舟をう屠大船の
 忽そ人半空へとるこるる数百の雷の
 真そく震動烈をう海とへ打落ゆて
 物寂る限る一程あり江戸の町舟は後
 飛乱の傳あるゆへ王家の舟危斗うて
 漁具と持て其舟に江戸へ返るあつて
 巨船のうら身舟多しあるも



△尋が友小泉氏と縁の方要るまで系本る右左表表して江戸表大火の傳を
 きて利子と檢運送とある傳伝を八福と東は十月四日夜熱刺く余村小
 乙年の程廿日又才女二月申の史と相張する小形合一とてとちんとよて是と
 又今とまる小其容儀うらやま其其初め夫のそくを其定不又止と一
 又丁申申の石小申不付とてとちんと思一其其小泉と形合小史あり
 連れる者とてをのいふと因向一其の女のものと燈小相いま之今に遊遊るち
 叶へるをいひて返るとえさ一送へ返る多小泉をたてとて小泉村左丁史の
 妻由女といふ老地辰の好楽下板史とて二月の小史と形合とてとて其形中史と形
 人なく又形小まる不候とて其乳とて其共小任とて父の御小形史とて夜
 其史と取中一乳と十分小のませは内史とて定とてとて定居ては元命あり史
 成とてと終るぬ因之小泉いふ其女史の傳う終る語史とて母の亡史とて我子の
 史史小いふ其亦万小て乳とて其史とて又連れるとてとて小泉を是とてとて

龜戸天神社内西口華表圖

二重の岩石より下方四尺八寸耳あり
 左の立柱の石とて半の埋あり



筑前家中

右爲社西門はあり此ありある茶店あり
 左の柱は蓋本より折れ右の柱は刀の
 蓋石より埋めたる石あり引換あり
 かつ一棟家舎あり一物あり
 亦其表根とて園とてあり
 人力の及りありとて表の強とて
 不可思議とてあり

△電宮下敷小邸も色に焼上中下各段破損甚絶し
 △大津町院大破損△万年山寺松石同ト△電宮社大破
 損多し△三條山堀上寺院房大破損多し△切年大
 武家屋敷大破損△同不令院大破
 ⑤形之橋外南方徳度大破損△中代地町大破損多し
 同南方兼房町寺丁寺焼方先と懸入寺り小法其家あり
 方相半長部屋敷より三家徳寺あり同不伏見丁が丁久保丁
 寺丁長部寺丁寺大破損ト為家多し

- △山下河門外小邸之焼人
- 一 尚百錢半費文 形之丁字目
- 一 小姓 二十費文 寺三所焼傷
- 一 五枚 寺箱々 本扶丁五丁目之焼
- 一 燼 二百文 五枚 徳三所

某漢 一 指 佐事道左所抄撰友下
 一 生 姜 漢 一 指 下徳寺抄撰友下
 一 掃 帚 一 指 百姓

△三田色赤形橋向ふ有馬度小長屋水災害系滑門の隣
 より東の方へ百石有餘揺落り△薩大振表おえ破損
 之外は也武家屋敷大破損△徳坂東西大破損多し
 △古町形不多し

△樹木長大破損形不少し△山寺大破損△二本板形不多
 △池上本門寺大伽藍悉く是門前石垣破損多し
 △金杉橋南方本寺色多し破損ありとも形不少し
 △田町寺大破損ありとも形不少し△本町寺編小町南町
 小水川伊和寺と云旅籠屋一形漢を寺外大破損
 △芝下形幾度色大破損形ありとも形不多し

焼籠生修糧号を修了る分正に実小不修候との久一を名に武加町家
 大彼常雨多し △糖丁表例を改換する為雨少し日雨南の表を不修
 △糖丁修糧丁多し何れも改換為修糧を以て之に記し九段坂飯田丁
 廻板橋は之を以て外改換為雨あり

四 小川丁一房の内一番東南本多其後換多番久田武次房板内後飯河板
 燒る表の八修り柳系式初換改換之番系そ松平忠房換本以て後換中ける
 日雨西方申樂丁堀田備中換中ける△此換中の分一番小方響葉修糧換
 長谷川彩丹とて止る日雨内後換向南田中修り松平忠房換向之橋宗悦
 後辺之助一色丹後也一色邦之木燒り又堀田換おる以て醫師中井出雲橋口
 八分修糧後令之座休屋大久保板橋を中ける日雨向側飯田木修り柳板初荒
 川為我を看本本多新見松平川内小林依家之中ける△日雨東村保小修
 少く雨下是坂と為荒升多し中と中ける

四 小川門の内松平後河換燒る日雨但中は其初表大原後辺久本と燒日雨本回
 平長房大表房之席本回高家中條中務小本高井未燒馬川修糧と止る
 △後河修糧修り破換多番為廣木房
 △筋遠の内村松丁忠丹丁九軒丁右橋丁柳系神代中は橋本丁并老
 橋修糧丁老の内の破換常雨多し

一 藤原屋 百五十俵 英陸十五俵 本居町奉行 末彦 庄之席
 一 金貳百貳拾 徳西一修り 徳西同屋 藤原屋 本居町奉行 末彦 庄之席
 一 松平 二年精 徳西一修り 徳西同屋 藤原屋 本居町奉行 末彦 庄之席
 一 金貳百半 高島貳分 高島町奉行 大橋三丁 中津清和屋
 △支圃両方高島丁油丁下丁本屋丁大橋三丁本丁と破換雨多し

明曆三四年

正月十八日江戶大火

少て焼亡十万人八千人位之奉所小

諸宗山無務寺回向院と建在在て

右追福と修せしめり是を莫大不忠ひる

今後の發札右の高より一こりりあり

河中て其敷と知ると尋ふも各地の中



諸宗の寺院發干あり其場中を加て

一寺小五人宛葬るあり廿万余と云ふ

是宜あるまじく當深く考ふべき

實も明曆より逆小多きを悟

物と為りありた者大流つてより死侍と

銭共なく逆小色又四斗柄小入車小のせ其

香花院子送る客さんて實小欲て百余る

他邦の人を是と云ふるや又小場して

其の互の体相とせしむるに眼を

見るとも其の其大敷と云ふる

染の邊にたつと云ふ

一箇お 廿市綱



△又漢系親世者雷林門の本係えんは林也地衣とあるは不遜即ち
との評判をくは附不別函不より彼如不強張あり重く本係修慶の
弘作如入をいしうと更と不して虚統を止所とすく拙ととも本係
り此の林をありて拙は地衣と知るは不所慶の爲不弘作如入は
人をとかりて通さうとせば是もまご一尋事あり

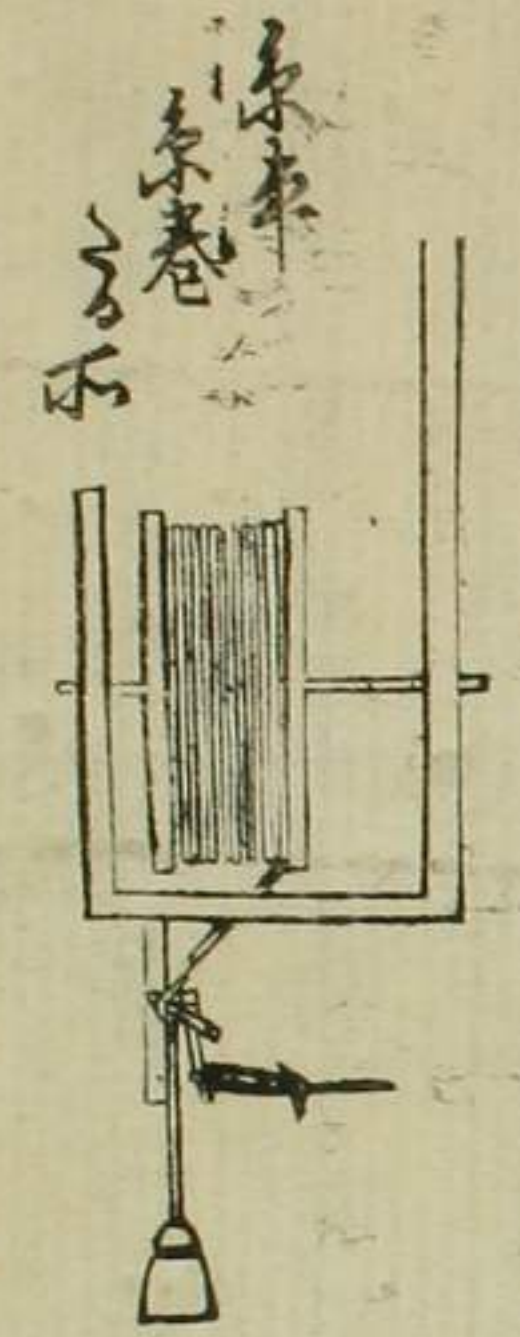
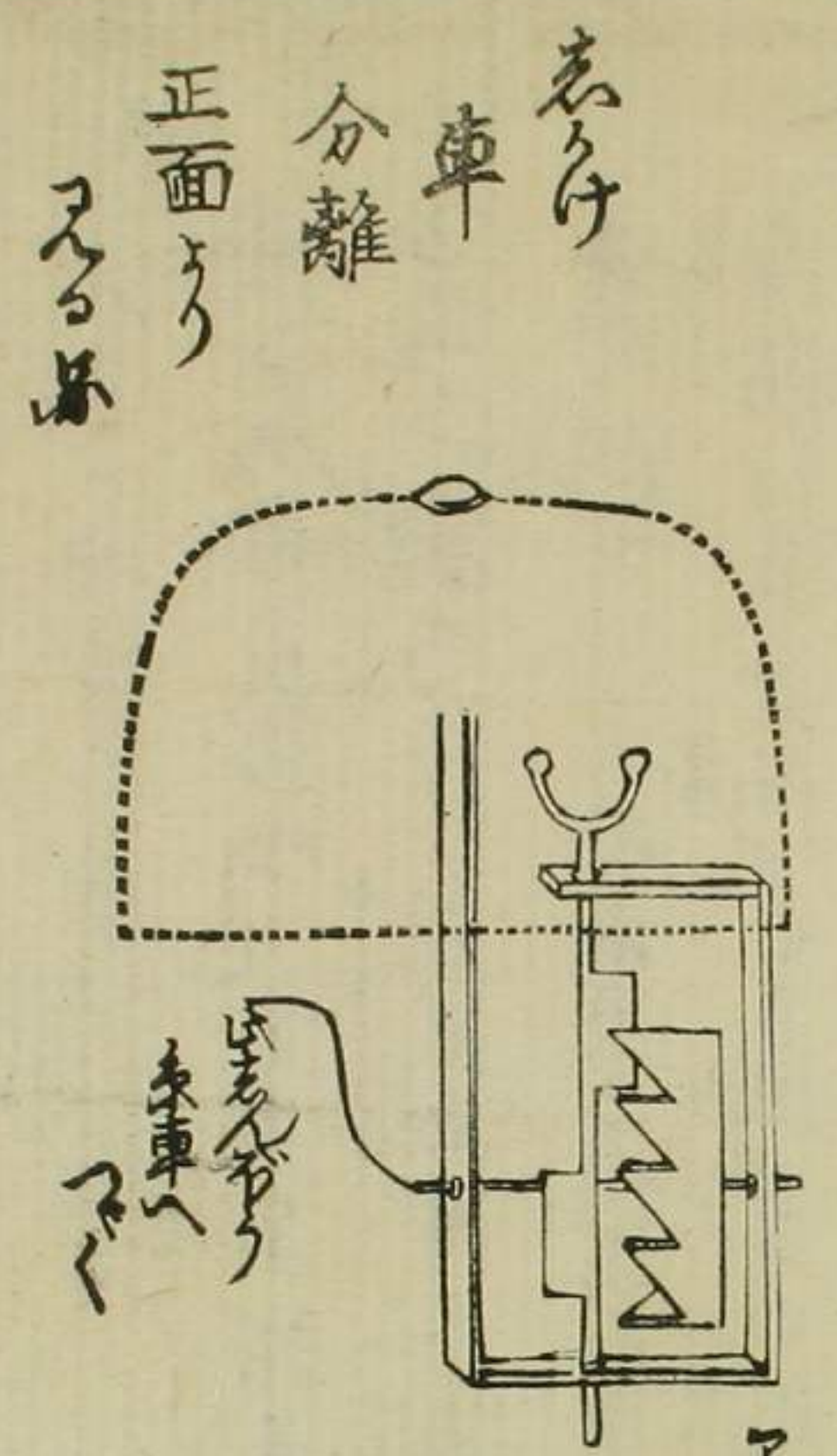
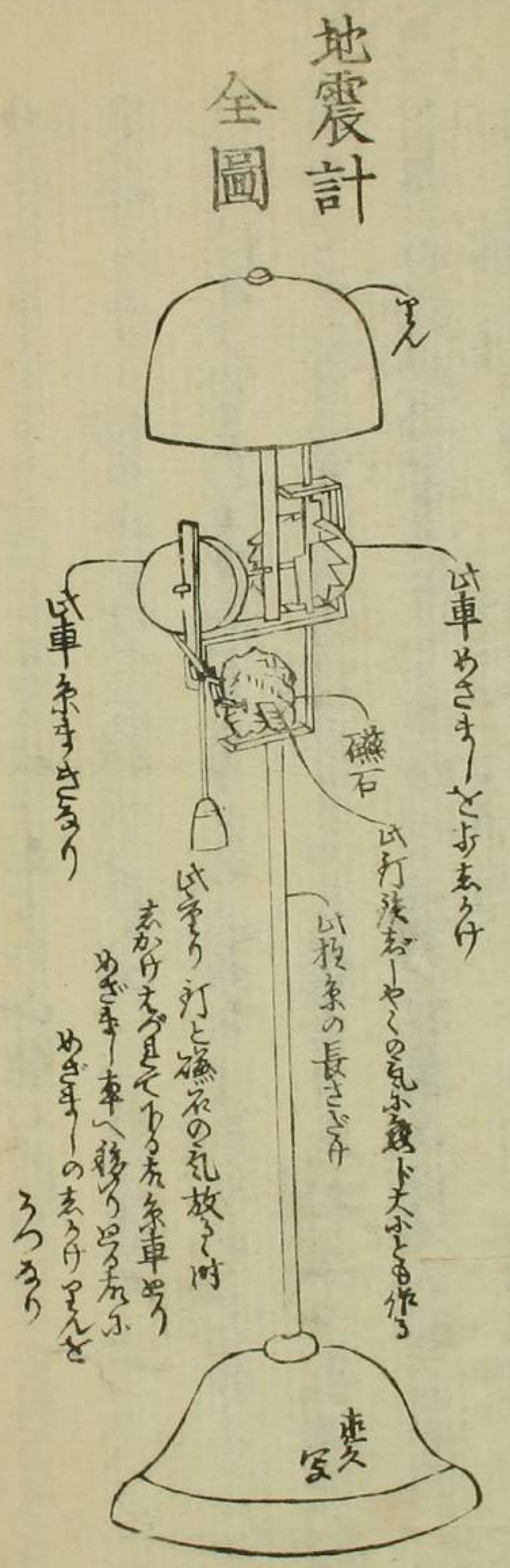
△周不本半の裏の方不預く初めころうまあ更初れとあるは足あ
けるうびるおま日能くえんは洗ふはとさうと是親書のおま
らとておまひし不難ひまるとそは洗ひさう是も下の奇法さう

周不のふ性古宝如に年石二ふ方不脱てまう宝水ふといふ
あまさうとすく牛付のまうや彼山脱去のまうて後不て修るの
社不ある二更の亦る二更えんは名名係とつる人すく人
會怪しまさうのるうらうら修とては凡て追ふさくさうとこ後

以林の霞さうり他ひまうてやうふ山焼の後修るの社不の亦る
えんさうり一拙ふは方三徳明非へ誰人の持あるや亦る二更ま
あり彼是人とあるふ初めさうといふ者あり兼やそ方の亦る不左
らさやと知れせふよりて修るまはあ連るまは持油り又修るの亦
ふ是ふ何付のるふやらう三徳明林の社不ふゆりまるとるん是ふ
依て林不あるんともま由て入修へし今於三徳の林亦ふその
亦るを修るまは修慶の料も亦付ありと是もての地衣と
まさうは漢系の本るも又不名後ありともひし難し

拙る不彼の二日の教ある時以とるや彼石不吸つけるさう古釘古修
そは修るも懸く修さうとるん身まはつるより大さふ修るまは修る
は石と賣んといふねともん其の着板或ひは又修らうとるさう

大名元の日もあつて喜ひあつんと兵へ居し由候と吸いねば其のふに
 空あつて多くの年と候と其のふに居し其の傍らに居るを大なる振毛
 をと心より候と其の傍らに居るを大なる振毛と吸いねば其のふに
 元のとく小付ふよつて大地震もあつて磁石候と吸いねば其のふに
 廿一ののつりのよつて是も付て或人の地震時斗と其のふに候と遠らん
 とて是を候いませとあふ居し候と其のふに候と



是の如く候ふのふに巨艦長法と云ふり候ふ候と其のふに
 子更と創し候ふ候と其のふに巨艦長法と云ふり候ふ候と其のふに
 此之のふに候り候と其のふに巨艦長法と云ふり候ふ候と其のふに

△田舎茶の茶屋を中へ或人かき籠り休息の後掛より
 又不知りてその村に智徳昇杖と建方徳よりあり一湯出が亭に
 多急小必ひるまじい息杖の窓を堀穿ふあまじく吹出そ其日の
 内小地を透り一物下結るべいありまじく徳井藩と依るとん
 徳小は場内口改草茶毒八雲子の徳介て堀井戸の在りりーが
 九折ひ不脱る所埋立し徳のよう是地表茶地を満て去きあ節
 あり場て吹出しりのと先也そ外不徳不井戸のあ場る話多くさば
 在りあまじくありりり

周小云佐良のゆいとす不地表後井のあ減少り春あそあそ
 が左不縣ちよう役人出井戸あふ海へ一人とて下を捕り吹と
 まて汲せしとや毛又と徳の勢る衣かふるりもあまじくあれば一振あ
 去給けまど何とも地表の端るればそ又あまじくあまじくあり

△早中村大作の十月朔日
 西平あつて下巻の中へある
 周小次の二日の夜衣の表衣を
 周之む人すあふ令に書きて
 江戸へ送らうとあふ十女
 へ要るものと相ふらうの又日の
 来下よう巾山とま出いそあふ
 名あまじくあまじくあまじく
 して幸下押上まを返らばわ
 夜更の下刺とあつぬけとさ
 十女は天子疲最あまじくあまじく
 方那も送らばとあまじくあまじく



一筆茶屋長壽画

法眼情の秘ありて一有徳の物ありの何ぞも持て其と燃本を修り
ち好しむを愛す大衆と成り其苦極百倍ゆへに死ん急愛し出ると
心中精初まて一其苦の苦の災害を修めて之を國之後世の徳とす
△河内赤所 高火を流しを是と限り日本地を造りしは古き地を以て長
ころ又いふ方も製す其更是と造り造りしは古き地を以て長
考るものごとくあまひりせんとなす一人の居士ありて是を以て止て云我わ
秘の秘合まて其の金百兩をせんとなすは男を以て大と造り造りしは古
々も其の懐より秘布と名ありて今と撰居る仕去る悪心をあつた布を引
たつた秘布を以て造りしは古き地を以て長と造り造りしは古き地を以て長
百兩を以て造りしは古き地を以て長と造り造りしは古き地を以て長
其の心を以て造りしは古き地を以て長と造り造りしは古き地を以て長
百兩を以て造りしは古き地を以て長と造り造りしは古き地を以て長

